タイトル　「」変わる社会・教育・保護者の役割 ～立ち止まって一緒に考えましょう！～
講演者　私立三浦学苑高等学校　野櫻 慎二

普段子どもと接するときに気をつけていることは？

Ⅰ：変わる社会・学校・生徒の意識

１.変わる社会・学校・生徒の意識

⑴ 社会情勢の変化

V volatility（不安定性）
U uncertainty（不確実性）
C complexity（複雑性）
A ambiguity（あいまい性）

キーワードは「想定外」と「板挟み」

⑵ 変わるキャリア教育
（ライフステージモデルの変化）

- これまでのライフステージは「教育」→「仕事」→「引退」
- 今、そして今後のライフステージは「教育」→「会社員」と「副業」や「起業」、「学び直し」→「ボランティア」と「会社員」など「複数の選択肢」→「引退？」
- スタンフォード大学 ジョン・D・クランボルツ教授が 1999 年に発表したキャリア理論である「計画的偶発性理論」
- 「計画的偶発性理論」とは、「個人のキャリアの 8 割は予想しない偶発的なことによって決定される
- 「正解」を求める時代から「最適解」・「納得解」を探し求める時代へ
- これからの時代は、「頭の良さ」ではなく「頭の使い方」、「情報処理力」から「情報編集力」

⑶ これからの社会に求められる人材

- 自ら課題を発見し、他者と協働し、答えを作りだす力の「学力」
- 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決すえ資質や能力の「生きる力」
- 主体的に学び続ける人材

２.教育の変化→教育はどう変化すべきか

- 何ができるようになるか？
- 何を学ぶか？
- どのように学ぶか？

→「OECD Education2030」が示すコンピテンシー3 本柱

- 何かを生み出すために学ぶ「新しい価値を創造する力」
- ジブンゴト化してやりきる「責任を取る力」
- 対話を通して仲間とやりきる「対立とジレンマを調整する力」

３.高校生の意識の変化

（日本財団実施「18 歳意識調査-国や社会に対する意識（日本・アメリカ・イギリス・中国・韓国・インドの 6 カ国調査）-」

- 「自分の国の将来について」
  良くなると回答：13.9%（最下位）
- 「自身について」や「自身と社会の関りについて」
  肯定的な質問は主に 6 位。一方、否定的な質問は 1 位。

Ⅱ：保護者・教員として生徒とどうかかわるか？

４.保護者・教員の関わり方

→「手を『はなす』ために手をかける

- プロセスを認める→保護者が肯定的にかかわる
- ともに考える→原因思考でなく、解決思考
- 子どもが決める

→「聞く」・「話す」コミュニケーションでお互いの信頼関係を築く

「人生がかわるはずの名言集」

→「変えられないものとは、感情・生理・過去・他人、変えられるものは、思考・行動・未来・自分」など・・

「人生時計」：高校生は、まだ、午前 5 時から 6 時ごろ→高校生の時間は、まだまだ。未来はまだ広い。

「高校生が、『自分の可能性』に気づき、望みを持って人生を歩めるように！」立ちどまり考える必要があるのはないでしょうか。